

光陰礼讃 モネからはじまる住友洋画コレクション

泉屋博古館東京(六本木) 2022.05.21~07.31

「泉屋博古館」は、住友家が収集した美術品を保存・展示する美術館で、現在、京都と東京分館2か所で収蔵品や関連する作品展覧会を開催している。

名称の由来は、江戸時代の住友の屋号「泉屋」と900年前に中国で皇帝の命によって編纂された青銅器図録『博古図録』から名付けられているという。

本展は、泉屋博古館東京のリニューアルを記念して館蔵名品展第二弾として開催されるもので、住友コレクションの一角を占める近代洋画は、「住友吉左衛門友純(春翠)」が、1897(明治30)年の欧米視察中のパリで、印象派画家の「モネ」の油彩画2点を入手したことに始まり、その一方で「シャン＝ポール・ローランス」らのフランス・アカデミーの古典派絵画なども収集した。

戸外の光を追い求めた「印象派」と陰影表現による実在感を追求した「古典派」の両者を併せて「光陰」と捉え、この2つの流れを汲んだ初公開を含む「住友洋画コレクション約60点」を紹介しているので見応えがある。



クロード・モネ 《モンソー公園》 1876年 油彩/カンヴァス

春翠自身が明治40年にヨーロッパの視察に出かけて求めた絵画で、印象派の創始者である「モネ」36歳時の作品は、明るい風景を奥に自然の美が率直かつ濃縮されていて、樹木は見事な花が咲きそろい、緑の葉が太陽を浴びて美しく、芝生上に枝越し陽光を加えた作品である。



J.P. ローランス 《マルソー将軍の遺体の前のオーストリアの参謀たち》

1877年 油彩/カンヴァス

サロン最高賞である栄誉賞を受賞して、歴史絵画の最後の大家「ローランス」の名前を決定づけた作品である。

18世紀のフランスの将軍「マルソー」の死と、死を敵であるオーストリア参謀らが悼む様子が描かれている。